



沖

俳句雑誌[おき]

5月号

沖 発行所

春の空白

能村 研三

井上ひさし先生一周忌に

市川市文化振興財団の前理事長であつた井上ひさし先生が亡くなられて一年になる。

先生は、市川に約二十年間住まれ、この間に多くの執筆活動をされ、直木賞も受賞されている。先生は、山形県生まれで、仙台の高校に通い、岩手県の釜石市にもおられたことがあり、今回の東日本大震災で甚大な被害をもたらした被災地とも縁が深い方でもあつた。

東日本大震災
春雪の瓦礫包みて至宝なる
想定の外 of 悪夢や涅槃西風
闇おぼろ幾重拭ひて「生きてゐる」

風評を被りて蒨葎草の艶

代表作である『吉里吉里人』や「ひよっこりひょうたん島」は、役場ごと津波で流されてしまった岩手県の大槌町が舞台で、今回の地震と津波で町長をはじめ五百人以上の方が亡くなられ、まだ千人を超える行方不明の方がいる。先生は『吉里吉里人』で東北人の優しさ、団結心、独立心を描いておられたが、先生が生きておられたら、今回被災された方々にどんな励ましの言葉があつただろうか。

先生は、人から求められると色紙に書く言葉がある。その一つが、

むずかしいことをやさしく
やさしいことをふかく

突然に春の空白地震止まらず

停電におぼろ包みの街の黙

田端文士村

養花天師の青春の地の遡行

桜まじ「田端組」てふ画家文士

春よ春赤紙さまへ師も来られ

龍之介木登りの空鳥雲に

ふかいことをゆかいに
ゆかいなことをまじめに書くこ
と

これは「沖」の三十五周年の記念号
にもこの色紙を掲載した。

この他に、よく書かれたのは「得
意泰然 失意平然」という言葉。こ
れは、「調子の良い時も決して油断
せず、不調の時こそ平然と立ち向か
う。」という意味になる。私宛に書
いていた色紙には、

涙を時いて 喜びを刈る

という言葉。これは、もつと分かり
やすく言えば、「ひよつこりひよ
たん島」の主題歌である、

苦しいこともあるだろうさ

悲しいひともあるだろうさ

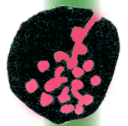
だけとぼくらはくじけない

泣くのはいやだ笑っちゃおう

進め

ということになる。これらの先生の
言葉は今の被災された方々や、私た
ちを励ましてくれる応援の言葉のよ
うにも思えてくる。

蒼茫集



千年目てふ

東日本大震災

吉田政江

千年目てふ春を破りて巨大地震
三月十一日日本地 凶歪む
かまくびを持ち上げ春の黒い浪
本震余震ゆれは変らず春の闇
春の激震平成の世の生き証人
逃水やいつも追はるる役どころ

震度六

上谷昌憲

陽炎のはたと止まりし震度六
執拗な余震に街の冴返る
白梅の慄へて地震の揺り戻し
人はただおろおろ竦む春の地震
余震慣れせし犬ふぐり犇けり
春疾風地震の難民駅にあふれ

A4出口

千田百里

東風吹かば寄宿生徒の入替ぞ
かつて職場のA4出口かぎろへる
灯の入りにて捨値となりし苗木買ふ
初雛寄つてたかつて嬰あやし
剪定の身の反り七つこはげかな
貝寄風の寄せし砂踏む啄木忌

なんでも半

分つつ北川英子

うららかに老いてなんでも半分づつ
むらさきの袱紗包みや牡丹雪
胡沙降るやネット革命渦なして
機内食逃げるよ春の乱気流
まづ雛へ帰国のあかりホットワイン
原発も地震もなければ辛夷日和

三月十一日

細川洋子

三月十一日あめつち暗転す
耳奥に棲みつく地鳴り冴返る
春寒くはうれん草も被曝せる
下萌や互ひに助け合ふころ
漱石の胃弱思へり芹の水
まなうらは薄紅ならむ雪解川

羊羹 辻直美

万葉の山のあらそふ春来れば
建国の日や羊羹の端が好き
地震激し子の住む街の陽炎へる
雛菊の細かな揺れや余震なほ
時差のある旅もせずぬて耕せり
春田打つ一筆書のごとくなり

遠近法 森岡正作

現世の端に水脈曳く春の夢
梅開ききつたり猫の欠伸かな

世に長居したる椿の重ね落つ
春満月遠近法を疑へり
あたたかし本叩きぬる古本屋
着任す喇叭水仙高らかに

適齡期 宮内とし子

朧夜の湯葉のからまる箸の先
桜餅記憶はふいによりがへる
日課あるひとりの暮しチューリップ
神官のやうな板さん吊鮫鱈
赤き灯の最終バスの来る朧
適齡期なき世風船飛んでゆく

祈るかたち 辻美奈子

涅槃西風尖塔にある心柱
萌ゆるものあり地の底のこゑ聴かむ
汝はいつも祈るかたちにすみれ草
告天子声のはじめは大地より
人肌の春の日暮となりにけり
春北風子らの帰りを待つとなく

帰る場所 安居正浩

春昼の羅漢五百が好き勝手
春の水見てゐて春の水になる
嬰の手に握られてゐる春埃
雛の前下郎となりて酔ひにけり
春風の吹く休演の石舞台
帰る場所あるを信じて鳥帰る

あたたかし 田所節子

待春の立てかけてある母の杖
河津桜水面の青き空へ伸ぶ
大地てふぬくきふところ露のたう
めぐりあふ期待のありて地虫出づ
どろんこも素敵な玩具あたたかし
潮引きし浜に鳥くる雛まつり

道草 久染康子

日が差して鱗粉こぼす越冬蝶
春満月峽の棚田の万華鏡

摘草をして道草を食う藜をちけし

春の雪狂ひ降りしてはたと止む
まだ育つ余地ある浅蜷啜りけり
春しぐれ黒松多きかつしか野

防犯灯

恋猫の防犯灯を点しけり
霏々といふ雪を知らざる総住まひ
梅一輪大事な友の逝きにけり
紅梅や風に光に湿りあり
新しき補聴器鳥の恋留器具晴美
耳といふ留め具に鰓ふ花粉症

ははの部屋

ことしまた雛の間となるははの部屋
声出して笑へば心あたたかし
別の世や雪ある庭の無音界
海に添ひ残雪の尾根果てもなく
今日も豆煮てゐる春の寒さかな
釣り雛にふつと手のゆく長電話

海 嘯 秋葉雅治

いち早く北窓開く北志向
四方いまだ斑雪嶺囲み着任す
低唱のやがて絶唱卒業歌
賞詞みちのくは二句受く以下同文といふ臚
海嘯のあと瓦礫なす春山河
春北風や生死を分かつ水位標

磔像の釘 荒井千佐代

久女忌の髪の根痛きほどに結ひ
海に溶く春節の灯も街の灯も
らんたんの明るすぎたる猫の恋
囁れり受胎告知を祝ぐごとく
燭台の長き影曳く花の夜
磔像の釘も細れり油まじ

春北風 遠藤真砂明

産卵の浅瀬たかぶる菜種河豚
磯道は風鳴るばかり雑木の芽

日が沈む梅百幹の香を残し
明け星へ夫を押し出す若布刈舟
真砂女忌のひかり揃へて波がしら
春北風の津波警報まつたなし

夕 霞 鈴木良戈

鉄吊つて高きクレーン寒土用
寒林の四次元の枝絡みあふ
帰る鴨漂ふ雲を頼りとし
夕霞筑波の男嶺女嶺浮く
なだらかな山間の町雛祭

地 震 大畑善昭

春の地震位牌仏像揺り倒し
料峭や罹災といふは人智超え
まだつづく余震寒さもぶり返し
地震津波春寒もしや天譴か
蓬生ゆ津波の傷のふかき地に
原子炉の事故はどうなる彼岸西風

潮鳴集



嬰の爪 富川明子

薄氷や初めて切りし嬰の爪
てのひらの仔猫けむりのやうにゐる
方舟に花種乗せむ私なら
海へ出てもう嫌はれず杉花粉
菜の花が咲けば会おうと約せしに

噴砂 安藤しおん

東北関東大震災

砂泥吼ゆ浅蜷の漁場埋めし街
余震なほ風の階見ゆ紫木蓮
長蛇の尾三重に給水暮れかぬる
ポリ袋の春水嬰のごと抱けり
街かしぎ噴砂しらしら桜東風

医師の一团 古屋元

雪に雪時間に時間積みて住む
医師の一团寒明けのエレベーター
春愁の一音使はれぬピアノ
ぽつぽつと春灯昭和期の団地
地下鉄の柱は木の根二月尽

雨の日は 林昭太郎

雛の間にマナーモードの微震動
雨の日は雨の明るさ花菜畑
雲の影いくつも通し水温む
日窮りて引き揚げ刻の潮干狩
春惜しむ形状記憶スーツかな

沖作品



能村研三選

寒海苔やびしびし乾く音のして
血管のやう空覆ふ冬大樹
貝殻の螺旋は宇宙オリオン星
床の間にまみゆ師の匂やあたたかし
渡る湯へ一瞬若布色かへる
ジオラマのやうな街並み春夕焼
ふらここを漕いで無敵の気分なり
春浅し検査着の糊ききすぎて
外人墓地みな海へ向き黄水仙
永き日や奥行深き京町家
我もまた没後の弟子や涅槃西風
頬白の太郎次郎三郎どれがどれ
ほつかりと口あけ河馬も目借時
寄り合うて眠る猫たち戻り寒
逝きし人便りなき人二月尽

千葉

深川 峰子

東京

五十嵐章子

千葉

溝口 健也

夜の雪の街灯に降る一途さよ
全集の一書抜けをり春の雪
潮風をうすべに色に吊雛
駅傘の透明を選び春の雪
あやつりの糸のあるかに蝶の恋
末黒野に残るほむらや少年期
窓の蝶地下終着の京葉線
風船の糸の長さにある自由
啓蟄の地下道の壁油彩展
陽炎へる野に母子の像ムーア作
人住まぬ庭の白梅あかりかな
母の帯身に添うてより四温急
ものの芽の夜更けの月と尖り合ふ
焼きたての雪代山女魚湯気香る
小流れにベンチの茶席竹の秋

市川市

七田 文子

千葉

上田 玲子

佐々木 群

沖作品 15句選評

*
能村研三

貝殻の螺旋は宇宙オリオン星 深川 峰子

海辺に寄せられる貝殻の中には、美しい形をしたものもあり、とりわけ螺旋の形をした貝殻はまるで海から届いた宝石のようでもある。こうした貝殻が多彩な色と形を持ったのはおそらく何億年も前のこと。螺旋が整然と渦を巻いた姿は精緻で美しい幾何学的な造形美を作り出している。まるで、宇宙で渦を巻いている星雲のようでもある。貝殻は最も微細なものだが、とても大きく大きな宇宙のオリオン星雲も螺旋の形をなすものがあり、自然の摂理の不思議さを感じさせる。

ふらここを漕いで無敵の気分なり 五十嵐章子

ふらここ、つまりぶらんこは子供のための遊具だが、大人が漕いでも楽しいものだ。少し小高い丘にあるぶらんこを漕ぎ出すと、辺りとの風景も見下ろせて気持ちも大きく膨らんでくる。おとなしく座りながら漕ぐのものもあるが、立ち上がって豪快に漕

ぐと気分も爽快である。まさにこれが無敵の気分というものなのかも知れない。

頬白の太郎次郎三郎どれがどれ 溝口 健也

頬白はスズメ目ホオジロ科の鳥。全長十六センチくらい。全体に褐色で、腹部は赤みが強い。顔は黒く、目の上と下に白い線がある。日本では留鳥または漂鳥として低木林や川原に棲む。作者は川原で見かけた頬白に親しげに太郎、次郎、三郎とそれぞれ名前をつけて呼んでみた。しかし、飛び交っているうちにそれぞれの区別がわからなくなってしまった。

全集の一書抜けをり春の雪 七田 文子

全巻十何巻という文学全集か、あるいは著名俳人の全集であるうか。全集は全巻揃っていることに価値があるが、作者にとつては、好きな作品が入っている巻が馴染み深く、その本だけが手垢がついてしまっている。書棚に全部揃っているはずだったが、春の雪明りの中一番の馴染みの巻だけが抜けているのが気になった。

風船の糸の長さにある自由 佐々木 群

風船は春の季語で、ゴムなどの薄い膜でできた袋の中に気体を入れて膨らました後、その口を縛るなどして使用する玩具。気体が水素やヘリウムといった浮揚性のあるガスの場合には、さらに持ち手となる糸やリボンを装着する。糸の長さが長ければ風船に自由を与えつつも喪失する心配がない。(以下略)